２０１４年１１月号

今月の主張

２６日に健保組合が総決起大会を開催
皆保険制度を維持、守るため
―制度改革にぜひご理解を―

健保連が広報事業の柱として展開している「あしたの健保プロジェクト」は、10 月から全国で「笑ゥせぇるすまん 喪黒福造」を起用したテレビＣＭを放映しています。同プロジェクトの特設サイト（http://www.ashiken-p.jp/）にもＣＭ動画を掲載していますが、その内容はサラリーマン・ＯＬの給料から天引きされている健康保険料にまつわるお話です。

健康保険料の金額は、給与明細書をみても数多く並んでいる数字の１つでしかないため、残念なことに見落とされがちです。健保組合が皆さんからいただいた健康保険料で運営する医療保険の実態について、なおさら関心が薄くなるのも無理からぬことかもしれません。

日本の医療保険制度は国民全員が、健保組合、協会けんぽ、市町村国保などいずれかの公的医療保険に加入する、国民皆保険制度となっています。皆保険制度は、１９６１年のスタートから半世紀が経過し、多くの皆さんにとって生まれたときから身近な制度であるために、医療機関を受診する際に健康保険証を使用することが当たり前のように感じているのが実情ではないでしょうか。しかし、制度疲労が続いている現状を考えると、これまで当たり前だったことがそうではなくなるかもしれないのです。

健保組合は、皆さんから預かった健康保険料の約４５％を、高齢者にかかる医療費を支えるために拠出しています。収入の大半を拠出金にあてているため、非常に苦しい財政運営を強いられているのです。こうした負担の重さから健保組合が次々と解散することになれば、皆保険制度を支えてきた制度の一角が崩れ、医療保険制度の恩恵を享受することが難しくなり、医療機関を受診したときの窓口負担が現在の数倍に増えることも考えられます。

また、高齢者の医療費を拠出する現役世代の意識は、あしたの健保プロジェクトのホームページ上で実施した調査からみてとれます。調査結果をみると、

全体の８８％が現在支払っている健康保険料が高いと感じています。年代別では、２０歳代の９４％を頂点に負担の重圧を感じており、これからの社会を担う若年層の多くが、負担はすでに重いと考えていること、医療費が毎年約１兆円ずつ増加すると予測されていることを考えあわせると、近い将来、負担の限界がくるのは明らかといえます。

現役世代に偏っている高齢者医療費の負担構造を改めなくては皆保険制度は維持できません。また、医療費の増加を放置したままでは、どのような制度でも継続することは困難で、持続可能な制度を構築するためには医療費の適正化が欠かせないのです。

全国で１４１１の健保組合と健康保険組合連合会は１１月２６日、全国大会を開催します。大会の副呼称には「皆保険を次世代へつなぐ改革実現総決起大会」を、スローガンには、「前期高齢者医療への公費投入の実現」、「高齢者医療費の負担構造改革と持続可能な制度の構築」を掲げ健保組合関係者の賛同を募る予定です。将来にわたって〝国民皆保険制度を維持する、守る〟ために高齢者医療への公費投入、負担構造改革等の実現を期して、「総決起大会」と銘打ち、制度改革を強く求めます。

健保組合が一致団結して求める制度改革に、ぜひご理解いただきたいと思います。

２０１４年１１月号

けんぽ単語帳

■診療報酬

私たちは、病気やケガなどで保険証を使って医療機関にかかった際、受けた治療や投薬にかかる医療費の一部を窓口で支払います。

医療機関は、窓口負担額と健保組合などの支払額をあわせた医療費を受け取っており、これを「診療報酬」といいます。

診療報酬は、国が定めた公の価格である「診療報酬点数表」によって、レントゲン検査に何点、注射に何点など、医療行為ごとに点数が設定されています。

この点数を「１点＝１０円」で計算した額が医療費になります。

■中医協（中央社会保険医療協議会）

診療報酬は、２年に１度見直しが行われます。見直しの議論は、中央社会保険医療協議会（中医協）で行われています。

中医協は、保険者など医療機関へ診療報酬を支払う「支払側」（健保連など）、医療行為を行う「診療側」（病院団体など）、そして、学者などの公益代表がメンバーとなり、消費税の引き上げに伴う診療報酬の見直しや、特許のきれた薬剤などの価格の見直しなど、さまざまな内容を協議しています。

中医協の協議内容を踏まえ、厚労省が最終的に診療報酬を決定します。

■レセプト（診療報酬明細書）

すべての日本国民は、医療保険に加入しているため、医療機関にかかった際の窓口負担が安く抑えられます。（原則３割負担＊）

窓口負担以外の医療費（７割）は、加入している医療保険者に請求されます。この医療保険者への請求の際、医療機関が作成し送付する診療報酬の明細書を「レセプト」といいます。

レセプトには、診断名や行った医療行為、診療報酬点数、患者が支払った窓口負担の額などが記載されています。

＊窓口負担の割合は、年齢等に　よって異なります。

２０１４年１１月号

COML［電話相談の現場から］vol.114

医療機関の機能分化

【相談】

独身で一人暮らしをしている叔母（７８歳）は、先日買い物に行く途中で自転車と接触して転倒し、救急搬送されました。検査の結果、外傷性のくも膜下血腫とわかり、溜まった血液を抜く手術を受けました。

入院直後から「症状が落ち着いたら、リハビリ専門の病棟がある病院に転院していただきます」と言われ、何やら落ち着かない気分でした。叔母の面倒を見るのは私以外にいないので、すべて私が説明を受けていたのですが、病状より重要なのかと思うほど、転院の話に重点が置かれていました。

約３週間で脳の状態は落ち着いたと判断され、リハビリ専門の病院に転院しました。リハビリ専門というだけあって、一日の生活すべてがリハビリにつながるようにプログラムが立てられていました。その甲斐あって、叔母はしばらく経つと車椅子に乗って移動ができるようになりました。するとソーシャルワーカーから連絡があり、今度は「療養病床のある病院に転院する準備をしたい」と言われたのです。これではまるで、患者はベルトコンベアーに乗せて加工していく商品のようです。落ち着いて１カ所でじっくり療養できないものなのでしょうか。

【コメント】山口育子（ＣＯＭＬ）

最近は１カ所の病院完結型で治療が受けられなくなってきましたので、入院生活は非常に慌ただしくなっています。これは、医療機関の機能分化が進んできた結果なのです。病気やケガで積極的な治療が必要な場合は「急性期」病院が役割を担います。より重症の場合は「高度急性期」もあります。症状がある程度落ち着くと、今度は「回復期」の医療機関、さらに落ち着くと療養病床などの「慢性期」の医療機関を利用する場合もあれば、在宅医療へと移行していく場合もあります。

今年から一般病床を持つ病院は、病棟ごとの機能を、上記の４種類に分けて

都道府県に報告する制度が始まります。都道府県はその実情を踏まえて将来的な、特に２０２５年を視野に入れた地域医療ビジョン（構想）を立てるのです。このような動きを私たちも理解する必要が生じてきています。

２０１４年１１月号

離れて暮らす親のケア［いつも心は寄り添って］ vol.32
NPO 法人パオッコ ～離れて暮らす親のケアを考える会～ 理事長 太田差惠子

故郷の親を狙う悪質業者

高齢になると外出機会が減り、家のなかで過ごす時間が長くなりがちです。それは、悪質な業者にとっては好都合なこと。たとえば、「床下の無料点検キャンペーンを実施しています。ぜひこの機会に」と、頼まれてもいないのに訪問。床下をのぞいて「湿気で土台がカビだらけです。このまま放っておくと大変なことになりますよ」と不安をあおり、不要な高額工事契約を迫る。工事関連だけでなく、さまざまな商品の売りつけ被害が日本各地で報告されています。

Ｋ子さんの実家では、８０代の母親がひとり暮らしをしています。お盆に帰省すると、飲んでもいない健康飲料が、箱のままキッチンに積まれていました。母親にたずねると、「買うまで帰ってくれないから、仕方なく購入したの」。Ｋ子さんは、今後は断りきれない場合には「娘に相談します」と告げ、Ｋ子さんに電話をするように言いました。

それでも契約してしまった場合には、「クーリングオフ制度」により申込みの撤回や契約の解除ができる場合もあります。手続きの詳細については、地元の消費生活センターで教えてくれます。また、国民生活センターでは、いま起きている高齢者・障がい者に関わる悪質商法や、製品による事故情報などを編集した「見守り新鮮情報」を月に２回電子メールで配信しています。先日Ｋ子さんは、国民生活センターのホームページから登録。「最近、こんな商法が多いらしいから、気を付けてね」と母親に念押しするのに活用しているそうです。

２０１４年１１月号

温泉ｄｅ健康に vol.32
温泉と宿のライター　　野添ちかこ

第３２湯　越後長野温泉（新潟県）
レトロムードな秘湯へ

　ＪＲ燕三条駅からバスに揺られること 40 分。
　守門川沿いに立つ一軒宿「嵐渓荘」の鉱泉は、塩昆布茶のような不思議な味。大正時代に夢のお告げによって掘り当てられた霊泉だ。
　昭和初期の料亭旅館を移築した木造３階建ての「緑風館」は国の有形文化財にも登録されている。
　敷地内には水車がまわり、かやぶき屋根の屋外卓球スペース、竹馬遊び、川遊びができるのどかな田舎の風景が広がっている。
　「山の湯」には川のせせらぎを聴きながら入れる２つの貸切風呂がある。外の景色を楽しめる露天風呂と静かなときが流れる内湯に浸れば身も心もほどけていくようだ。
　夕食の膳に並ぶのは、鯉のあらいやぜんまいの一本煮、にいがた和牛の石焼きなど素朴ながら洗練された山里料理の数々。ついつい酒杯が進む。
　翌朝は名物の温泉粥。源泉で炊いたお粥は胃腸にやさしいヘルシーメニューだ。秋も深まるこの時期にはこんな湯宿でしっとりとした時間を過ごしたい。

温泉ＤＡＴＡ
泉質：ナトリウム - 塩化物冷鉱泉
特徴：濃厚な塩分を含み、切り傷、やけど、あせもに効果的
嵐渓荘 TEL:0256-47-2211

２０１４年１１月号

追ってけ！カルチャー vol.44
明知真理子

おじさんがほっとする“サテン”で出会う
人と歴史の交錯

　昔ながらの喫茶店を訪れるのが流行っているようだ。大手チェーンも近頃はセルフサービスより、店員が注文を取りに来るスタイルに力を入れていると聞く。
　喫茶店には、さまざまな人が訪れる。特に古い喫茶店には、職種も分からない人たちが隣り合って座り、新聞を読んだり、時にマスターと言葉をかわしたりしている。
　そんな喫茶店の１シーンが描かれるのが、泉麻人の『東京いつもの喫茶店』。平凡社の人気ウェブエッセイをまとめたもので、『東京ふつうの喫茶店』に続く２冊めだ。
　古い商店街を抜けて趣きある喫茶店に立ち寄る。選ぶ店は今風の“カフェ”ではなく、おじさんがほっと落ち着ける“サテン”であることが条件だ。古いＴＶゲーム卓や窓から見える古い看板を観察し、聞こえてくる謎のカップルの会話を分析する。コーヒーよりも、人と歴史の交錯を楽しんでいるようだ。
　マスターに店の歴史をたずねるのだが、それがまた面白い。元から喫茶店ではなく、鞄屋や傘屋だったりする。饒舌なマスターの話に客が口を挟んだりもする。
　登場するメニューもさまざま。分厚いホットケーキや懐かしいプリン、スパゲッティ（パスタではない）、はたまた焼きうどん。幼い頃、母に連れられて行った喫茶店のドリアは世界一だと思ったが、今食べるとどう感じるのだろうか。
　喫茶店では大事件は起こらないが、それがいい。その地の日常を優しく包み込んできた喫茶店。たまには足を運び、思い出の１ページを増やすもいいのではないか。

『東京いつもの喫茶店　散歩の途中にホットケーキ』

（1500円＋税）
題名の「いつもの」とは実際いつも行くわけではなく、“ふつうの”という意味合い。ふらりと立ち寄った街の喫茶店で出会う日常はどこか懐かしく、ほっと癒やされる。